

健康の定義から考える

岡田 暁宜

愛知教育大学保健管理センター

周知のようにWHO（世界保健機関）は1946年に健康を次のように定義した。“Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.”これは本学の保健管理センター施設内にも掲示してある。1998年にこの健康の定義についての改正案がアラブ諸国を中心としてWHO執行理事会へ提出された。改正案は次のようである。“Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.”。つまりdynamicとspiritualという概念が付け加わっているのが特徴である。結局、世界保健総会（World Health Assembly：WHA）の審議において採択されることはなかった。しかしこの健康の定義をめぐる世界情勢は、我々に健康についてさらに考える機会を与えるものである。

採択されなかった最大の理由はspiritualをめぐる理解からであった。spiritualというのは日本語では霊的と訳されるが、宗教的な意味を含むために宗教との混同に対する懸念があったようである。またこれによるいわゆる代替医療の横行への危惧もあり、現段階では改正の必要はないという結論に至ったようである。但しspiritual dimensionの重要性については異論はないようである。国際的なコンセンサスを得られなかった理由は他にも色々あるだろう。

私がここで注目したいのは、改正案がアラブ諸国から提出されたという点である。アラブ諸国における健康観に強く影響を与えているのはユナニ（ペルシャ語でギリシャ的という意味）医学である。これは7世紀のサラセン帝国の時代にヒポクラテスに代表されるギリシャ医学を導入したことに起源がある。その後、エジプト

医学や中国医学の影響を受けて10世紀に体系化された。このようにユナニ医学は長い歴史をもつ医学大系である。このような伝統医学を基礎とするアラブ諸国から提出された健康の定義は、現在の世界医学の主流である近代西洋医学の中の健康に対して、新たな疑問を投げかけているようにも思う。

近代西洋医学はデカルト的二元論などの哲学に基づき科学的に構築されてきた。その過程で精神と肉体の分離と細分化により、医学は進歩してきた。これは疾病に対する治療論の中心となっている。これに対するアンチテーゼを、医学の分野では心身医学や1998年にWHO執行理事会へ提出された健康の定義の改正案の中に見出すことができる。近代西洋医学が円熟期を迎えた現代では、遠い過去より全人的アプローチを長い間実践している伝統医学に関心が向けられるようになった。だが私は伝統医学を推奨するつもりは全くない。しかしこの現実を直視しなくてはいけないと感じている。私はむしろ西洋医学と伝統医学は弁証法的な関係にあると思う。

私は東洋の文化の中にいながら大学の医学部で近代西洋医学を学び、今までそれを実践してきた。医学部を離れて、現在、教育大学の保健管理センターに勤務しているが、やはり近代西洋医学を基にして保健管理業務を行っている。教育大学の中から（医学の外側から）医学を眺めることは、私にとって色々なことを考える良い機会になっている。違う視点をもつことは、学問の発展に重要なことなのだろう。それは、私の専門である精神療法において、常に問われていることである。「異文化」に触れて、交流することは辛いことだが、生産的な営みなのだろう。